

● 基調講演 ● 東アジアの安定的発展と日本の役割

財団法人日本国際交流センター シニア・フェロー
東京大学公共政策大学院特任教授
元外務審議官

田中 均氏



日本にとっ
て東アジアは
死活的に重要
な地域であ
る。日本の将来は、世界の成
長センターである東アジアの
発展にかかっているといつて
も過言ではないが、極めて大
きなリスクを内包しているの
もこの地域の特徴だ。従って
リスクに対する十分な備えを
持ちつつ、問題を解決する仕
組みが不可欠となる。
そういう意味において、東
アジア共同体の考え方は正し
い。

自由貿易地域つくりリスク低減

地域の信頼性を高め、発展
させていくことであり、これ
こそが日本の役割だ。と考
える。その際、前提となるのが
安定的な日米関係である。私
自身は現在の中国が脅威だと
は思わないが、政策の予見可
能性は低い。中国との関係を
拡大している東南アジア諸国
の有識者も同様の不安を口に
する。日米関係は決して2国
間のだけの問題ではない。アジ
アの多くの国が日米安全保障
体制に期待を寄せていること
についても十分な考慮が必要
だ。
東アジアにおける政策の原
則は、機会を増やし、リスク
を下げることである。機会を
増やすためには、重層的かつ
機能に着目した枠組みの一つ
とマーケット
を守る全地域
的な仕組みが
ある建物。い
わゆる非伝統的安全保障のた
めの協力の枠組みである。
私は特定の支持政党を持た
ないが、政権交代は既得権益
に縛られずに新しい政策を実
行する最大のチャンスだ。鳩
山内閣が東アジア共同体とい
う掛け声だけでなく、こうし
た制度設計のための戦略を練
り、政策を具体化していくこ
とを切に願う。

一橋大学
東アジア政策研究プロジェクト



21世紀はアジアの時代といわれて久し
いが、特に東アジア地域の目覚ましい発
展とそのポテンシャルは多大な関心を集
め続けている。一橋大学国際共同研究セ
ンターは「東アジア政策研究プロジェクト」を立ち上げ、東アジアの安定した
成長と各国の関係構築のため、文化、
社会、歴史、政治、経済などから多面
的な提言を行っている。先ごろ東京・
千代田区の如水会館でプロジェクトの成
果を発表する第1回シンポジウムが開
催された。

● プロジェクト説明 ● 「東アジア政策研究プロジェクト」とは



プロジェクト総括
一橋大学大学院経済学研究科長

佐藤 宏氏

一橋大学は、東アジアおよ
び日本が直面している構造的
諸問題を社会科学の様々な手
法で分析・抽出し、その解決
策を提言するため、2008
年夏に「東アジア政策研究ア
カデミー」を立ち上げた。
全体テーマは「東アジアの
安定的発展と日本の役割」・グ
ローバリゼーション・成長の
質・ガバナンス。社会科学の
総合大学である本学の強み
を生かし、高度な基礎研究に
基づく政策提言型の情報発信
を、全学的に行っていくこと
を目的としている。また、ア
ジアの有能な若手研究者を
様々な形で支援し、彼らと連
携を深めることも目的の一つ
である。
グローバル化によって急速
な変化を遂げているアジアに
おいて、国レベルにとどまら
ない重層的なガバナンスをど
のように構築し、成長の量で
はなく質をいかに高めるか。
歴史、経済発展、社会保障、
国際金融、国際政治、社会・
文化、企業マネジメントとい
った視点から5つのサプテ
ーマを設定し、その研究成果を
広く社会や政府に向けて発信
していく。

直面している問題の解決策を提言



● パネルディスカッション ●

民主主義は社会発展の原動力
平和のための文化基盤を形成



一橋大学大学院
経済学研究科教授
谷口 晋吉氏



一橋大学大学院
社会学研究科教授
足羽與志子氏

加藤 まずはアジアの歴史の
総括から浮かび上がる課題につ
いて、それぞれの専門分野から
提起していただきたい。
谷口 アジアにおいて経済発
展が遅れたのはなぜかを問
いて、その理由を専門分野から
提起していただきたい。
谷口 アジアにおいて経済発
展が遅れたのはなぜかを問
いて、その理由を専門分野から
提起していただきたい。



一橋大学大学院
社会学研究科教授
加藤 哲郎氏
(コーディネーター)

解決策は
平和構築支援
を行おうとす
るとき、様々
な問題が立ち
あがり、外部
不干渉の原則
があり、外部
秩序の特徴を一言でいえば、国
際関係の不在。国際関係が
不要だった伝統的華夷(かい)
秩序の下、強引に西洋の主権
国家体系が移植される過程
で、日本は危機意識から朝鮮
半島を安全保障の観点でとら
えるようになった。だが「西
洋の衝撃」に対処するために
日韓のリーダーが一堂に会
すること一度もなかった。
地域意識がないまま、縦割
りの近代化にまい進した結
果、各国においてナショナリ
ズムが正当な力を持ち得てし
まった。そのため隣国を共生
相生の競争相手としてとらえ
る傾向が根強い。留意すべき
は、朝鮮半島と中国では抵抗
的民族主義が容易に被害者意
識と親和性を持ちうるという
こと。こうした社会的な憎悪
を生みかねないナショナリズ
ムをいかに解きほぐすか。東
アジアが垂直的な秩序から、
水平的な秩序へと移行してい
く。その過渡期にあつて、文
化にこそ大きな役割があると
考える。

相手の主張を知って相互理解
歴史に問い続け現在に生かす



一橋大学大学院
社会学研究科教授
糟谷 憲一氏



一橋大学大学院
法学研究科准教授
コン・ヨンソク氏

加藤 歴史認識の共有という
問題についてはどうとらえる
か。
糟谷 日本と韓国の間では、
しばしば歴史認識のズレが問題
になる。その背景を2つの視点
から考えてみたい。
1つは「日本が朝鮮を植民地
化したのは必然だったのか」に
ついてである。19世紀後半まで
続いた東アジアの国際秩序にお
いて、朝鮮は中国の藩属国であ
り、外交の際には臣下の礼をと
らう。

コン 重要なことは観点を国
家、権力、資本、文明、拡大、
男性側に置くか、それを相対化
できるかだ。「近代」を総括す
る過程でトランスナショナルな
歴史認識の共有が可能だ。歴史
問題は重たいが、この問題が提
起された80年代以降、この地域
では戦争の可能性が低くなって
いるというの事実。歴史を問
うことで、過去の過ちは二度と
繰り返さないというコンセンサ
スが、この地域で生まれている
のはとても意味がある。歴史問
題を語るのにはつらい作業だが、
決してあきらめてはいけない。
足羽 文化人類学的な立場か
らは、共有というのはあり得な
い。共有は1つの均質化であり、
一致させようとするに大きく
政治的力が働いている。多宗教
に染みとおっている。多宗教
だから不安定なのではなく、
その歴史をアジアの豊かさとし
て肯定的にとらえることは
十分に可能だ。

糟谷 西洋に追随し、朝鮮
を犠牲にして日本の近代化を
進めたのは、当時としても間
違った考え方であつたと思
う。西洋中心ではない対等の
秩序をつくる選択肢もあつた
はずだ。
コン 当時の日本はアジア
主義を掲げた。アジアと連帯
し独立を確保するといった理
念があつたはずだが、韓国併
合によつてその理念を自ら損
ねてしまったのではないかと
加藤 最後に、東アジアは
宗教が多岐ゆえに、東アジア
共同体は難しいといった見方
もある。足羽 キリスト教が欧州全
体を覆う文化や価値観に染み
こんでいるように、多宗教で
あることがアジアの長い歴史
に染みとおっている。多宗教
だから不安定なのではなく、
その歴史をアジアの豊かさとし
て肯定的にとらえることは
十分に可能だ。



主催：一橋大学国際共同研究センター <http://www.ijrc.hit-u.ac.jp/>

お問い合わせ先：東アジア政策研究プロジェクト室 TEL 042-580-8765

広
告